ジェイン・オースティン『分別と多感』

宮 崎 孝 一

(1) 姉妹をめぐる風景

サセックス州のノーランド・パーク（Norland Park）の当主ヘンリー・ダッシュウッド氏（Henry Dashwood）が死亡したとき，夫人と三人の娘——エリナー（Elinor），メアリアン（Marianne）それからマーガレット（Margaret）——のために10,000ポンドの財産が遺され，それ以外の莫大な遺産はすべて，先妻の息子ジョン（John）に譲られることになった。ジョンは既に独立していて相当な財産があり，今更遺産など必要としないほどであるのに，この分配はあまりに偏頗なやり方のように見えるが，これには実は理由があったのである。ノーランド・パークには元来ヘンリーの叔父が住んでいたのだが，この人は独身であったため，ヘンリーを後継者に定め，彼とその家族をノーランドに招いて晩年を一緒に過ごしたのである。その叔父の遺言に記してあった分配方法を，ヘンリーは自分の遺産処理に当って忠実に実行したのであった。但し，ヘンリーはジョンに対して，義母や異母妹たちには温かい扱いをしてくれるようにと言い遺していた。

ジョンについて作者は次のような皮肉な紹介をしている。「彼はたちの悪い青年ではなかった。やや冷淡で，やや自分勝手なことが，たちの悪いことでないとするならば」（I，i）。そして，彼の妻ファニー（Fanny）については，「彼以上に狭量で，自分勝手であった」と記されている。

ジョンは最初はだいぶ気前よく，異母妹のめいめいに1,000ポンドずつ贈ろうとした。しかし，妻が承知しない。「あなた，うちの全財産を妹たちに上げてしまって，御自分や坊やは一文なしになってもいいのですか」というわけである。ジョンはそれではというので，めいめいに500ポンドずつということにするが，それでも妻の承諾が得られないの

で，では，義母に年100ポンドの年金を進呈しようとする。これにも妻は反対である。「もし，お母さんが十五年も生き延びたとしてごらんなさい，うちは完全にお手上げですよ。……年金の入る当てがあると，人はいつまででも生きているものなのよ」

こうして年金の案も取り下げとなり，結局ジョンは時期は定めずに，たまに義母に50ポンドぐらい上げれば，父との約束は守ったことになるだろう。それとも妹や義母が家を探すのを手伝ったり，また，時に魚や猟の獲物の肉を届けてやるだけでも十分だろうと考えるようになる。このような，ジョンの順を追っての提案は，妻の反論を誘い，それによって自分を納得させるためのもののように思われる。こうして彼は，義母や妹に対する好意を無限に零に近づけるのである。この経緯は，リア王が薄情な娘たちによって護衛の騎士の数を遠慮会釈なく減らされていく過程にも似ている。

ノーランド・パークにはジョンの家族が移り住むことになり，ダッシュウッド夫人と娘たちとは居候の身に落ちぶれる。経済的にも，夫の存命の時とは違って窮屈な生活を強いられるようになる。幸い，住居に関しては，親戚のサー・ジョン・ミドルトン（Sir John Middleton）が自分の邸バートン・パーク（Barton Park）の近くにある持ち家バートン・コテジを貸してくれるというので，母子はそこへ移って独立した生活を始める。

長女と次女については，作品の一巻一章に次のように紹介されている。

> 長女のエリナーは，しっかりした理解力と，冷静な判断力を備えていた。……感情は豊かに——気質は愛情に富み，感性は鋭敏であった。しかし，彼女は，それらを抑制する術を心得ていた。……
>
> 次女のメアリアンの能力も，多くの点でエリナーに劣らなかった。賢くて，才気に長(た)けていた。但し，何事においても激しかった。喜びも悲しみも抑えようとはしなかった。……要するに，彼女は慎重さ以外はあらゆる徳目を備えていたのである。

このようにエリナーもメアリアンも優れた素質を備えているが，相違は，姉が慎重なのに対して，妹は直情径行的であるということであろ

う。

さて，上に見たように，ジョン・ダッシュウッド夫妻の，事に臨んでの自己中心ぶりは，喜劇的に，あるいは凄絶に描かれているが，この人たちの日常の社交ぶりは如何であろうか。ダッシュウッド邸でのディナー・パーティーは次のような有様である。

> 料理は豪華で，召使の数も揃っていた。あらゆるものが，主婦の自己顕示欲と，それを支え得る主人の実力とを語っていた。……不足といっては何も見当らなかったが，ただ一つ会話が不足していた。この点では，ひどいものだった。ジョン・ダッシュウッドは，聞くに値するような話題はほとんど持ち合わせがなく，妻の方は更に徹底していた。しかし，これは格別恥ずかしいことではなかった。客の大部分が，応待を円滑にするための資格のいずれかの不足に悩んでいるのであったから――生得の，あるいは訓練によって身につけるべきセンスの欠乏――優雅さの欠乏――活気の欠乏――あるいは，平静さの欠乏等である（II，xii）。

要するに，これは俗人たちの群なのである。

俗人の一人に姉妹の大家さんの奥さん，ミドルトン夫人がある。

> ミドルトン夫人の，エリナーとメアリアンに対する応待は最高に礼儀正しかったが，彼女は内心は二人を好いてはいなかった。姉妹が，夫人に対しても，その子供たちに対しても，下手（したて）に出ることをしないので，夫人はこの姉妹は気立てのよくない人たちなのだと思った。姉妹が読書が好きだと聞くと夫人は，この人たちは皮肉屋なのだろうと思った。皮肉とはどんなものなのかは，夫人は正確には知らなかったが，それはどうでもよかった。皮肉屋とは，一般に人を非難するときに使われる言葉なので，それを使ったまでであった（II，xiv）。

こういう人たちの構成する社会に，エリナー（十九歳）とメアリアン（十七歳）が入って行くわけである。その場合，

> どんな些細なことについてでも，自分で感じないことを口にすることは，メアリアンにはできなかった。それ故，つき合いの都合でそれが必要な場合に嘘をつくことは，すべてエリナーが引き受けなければならない仕儀となった（I，xxi）。

メアリアンは，やむを得ず心にもないことを言う姉を見て，自分ならああいうことはしないと内心軽蔑する気持になる。しかし，思えば，直情的なメアリアンがどうやら世に容れられているのは，この姉の庇護があればこそなのである。

(2) ロマンスもどきに

メアリアンは，ある日一人で散歩していて，俄雨にあって斜面で足を捻挫し，歩行困難に陥る。あたかもよし，そこを通りかかったのは，狩猟服姿も凛々しい美男子であった。彼はメアリアンを助け起こして腕にかかえ，バートン・コテジまで運んで来てくれる。ダッシュウッド夫人も娘たちも感謝いっぱいでお礼を言うが，紳士はアレナム（Allenham）のウィラビー（Willoughby）と名のっただけでその日は帰る。しかし，翌日彼は見舞に訪れ，以後メアリアンと彼との間は急速に深まって行く。ウィラビーは，メアリアンがこれまで物語で読んで空想していたナイトのイメジにぴったり合った理想の男性であった。ウィラビーと話し合ってみると，音楽や文学その他に関する趣味，周囲の人々に対する好悪などすべて，二人の気持は完全に一致することが分かった。

姉のエリナーから見ても，ウィラビーは好ましい男性であったが，ただ思った通りを余りに率直に表に出すことだけが気がかりであった。

> これはメアリアンの性質に非常によく似ていて，特にメアリアンを喜ばす特徴であった。ウィラビーはあらゆる場合に，周囲の人々や状況にはお構いなしに，思ったままを遠慮なしにしゃべるのであった。他の人々についての評価を立ち所に決めて口に出し，自分が好きなこととなると，他人への失礼は度外視して，それに集中し，世間の礼儀作法は簡単に無視してしまうのであった。こういう傾向は，本人やメアリアンが如何に弁明しようとも，エリナーには思慮の足らなさと映り，承服しかねるものであった（I，x）。

ウィラビーは，メアリアンが乗馬が好きなのを知って，馬を一頭進呈しようと言う。メアリアンは大喜びだが，エリナーから見れば知りあって間もない男性から，そんな大変な贈りものを受け取ることは慎むべきことと思われた。それにバートン・コテジには廐もなければ，飼育に当たるべき召使もいない。結局この申し出は辞退せざるを得ないのが現実であった。それにしても，ウィラビーとメアリアンとの性情をよく表わした出来事であった。

また，あるときは，メアリアンはウィラビーに連れられて，スミス夫人（Mrs. Smith）の留守宅を見せてもらいに行った（スミス夫人はウィラビーの従姉で，将来彼女の遺産はウィラビーが受け継ぐものと一般に考えられていた)。帰って来たメアリアンが姉に，楽しかった遠出の話をすると，姉は，彼女がウィラビーと二人だけでそんな所へ行ったのは不謹慎だったとたしなめる。姉の言い分は，「あることが楽しかったからといって，それが正しいことだという証明にはなりませんよ」というのであった。それに対して妹は次のように答える。

> 「あら，全然逆だわ。楽しいということほど，正しさの強い証明になるものはなくってよ。私のしたことに，もし何か本当にいけない点があるのだとしたら，私はすぐそのとき気づいたはずよ。だって，いけないことをしていれば，必ず自分で悪いと分かるものよ。で，よくないことだと思いながら，楽しいはずがないでしょう」(I，xiii)。

これで分かるように，メアリアンにとっては，自分の感性だけが判断の基準であり，行動の指針なのである。これが果たして彼女の主張する通り，人生の危険や障碍を避けて幸福に達する道であるかどうかは，この小説の進行が示してくれる。

ウィラビーは，メアリアンと完全な恋人同士のように親しくつき合った後，ある日突然，やむを得ぬ用事ができたと言ってロンドンへ行ってしまう。この思いがけぬ成り行きに，メアリアンは深い悲嘆に沈む。母親ダッシュウッド夫人にしても同様であった。彼女は，娘から何も聞かなくても，二人の表情や会話から推察して，婚約しているものと思い込み安心していたのであった。ところが，メアリアンは，その性格からも

考えられるように，当人たちの間で心が通じていさえすれば婚約などという形式的なことには拘泥する必要はないという気持から，相手の約束は取りつけていなかったのであった。これを知った母親は強い不安に襲われる。

やがて，ミドルトン夫人の母親であるジェニングズ夫人（Mrs. Jennings）に誘われて，エリナーとメアリアンとはロンドンを訪れ，夫人の宿所に滞在することになる。メアリアンはウィラビーに宛てて繰り返し手紙を書くが，まったく梨の礫（つぶて）である。メアリアンの焦燥はつのる一方であるが，遂に姉と一緒に出かけたあるパーティーの席でウィラビーの姿を見かける。彼は若いスマートな女性と熱心に話しこんでいた。やがて姉妹に近づいた彼は努めて平静を装って話しかけるが，メアリアンは自分を抑え切れず，「まあー！　ウィラビー，これは一体どういうことなの？　あたくしの手紙着いたんでしょう？　握手もしようとなさらないの？」と顔を真っ赤にして叫ぶ。ウィラビーは冷たくそれをあしらい，一度姉妹の宿所を訪ねたのだが留守で会えなかったと弁解する。「でも，あたくしの手紙は着いたのでしょう。何か間違いが――恐ろしい間違いが起きてるのですわ。どうしたっていうんでしょう？　話してちょうだい，ウィラビー，お願いだから訳を話して！」（II，vi)。このようなメアリアンの訴えも空しく，ウィラビーは最前の女性を伴って立ち去ってしまう。

翌日，ウィラビーから手紙が来て，自分の言動に誤解を招くようなものがあったとしたら許してほしい，今自分はある女性と婚約中の身で，近日中に結婚することになっていると記してあり，今までメアリアンから彼に送った手紙と彼女の巻き毛とが同封してあった。メアリアンは絶望の極に陥る。

ウィラビーがなぜメアリアンを捨てたかの事情が次第に分かってくる。それは前からダッシュウッド家と親しいブランドン大佐（Colonel Brandon）の説明によるものであったが，ウィラビーは女癖が悪く，大佐が後見人となっている姪エライザ・ウィリアムズ（Eliza Williams）を誘惑し，子供を生ませた後捨てたのであった。大佐はこの件でウィラビーと決闘したが，二人とも傷は負わなかった。しかし，ウィラビーのこの破廉恥事件はスミス夫人の知るところとなり，彼は夫人から見離されることとなった。そのため遺産の見込は絶えたが，今まで身に染みつい

た贅沢と歓楽の生活は改められず，それを続けるためにはエライザと結婚したのでは無理なので，50,000ポンドの財産家の女嗣子グレイ嬢（Miss Grey）と結婚することにしたのであった。

メアリアンは怏々として日を送った後，ジェニングズ夫人の娘が結婚しているパーマー氏（Mr. Palmer）一家と共にクリーヴランド（Cleveland）に移ることにするが，ここで彼女は感冒が元で激しい熱病にかかり，生死の境をさまようほどになる。メアリアンの恋と病気については，評者によって異なった見解がある。リデル（Robert Liddell）は次のように言っている。

> インフルエンザとして表われるほどの情熱に捉われた女主人公を描く勇気のあった作家は数少ない。実際，メアリアンに比べれば，イギリスの小説中の，どの人物が，恋の姿をこれだけ切実に示しているか疑問である。恐らく，『大いなる遺産』のピップ（Pip）が挙げられようか[1]。

また，ローバー（John Lauber）は次のように言っている。

> メアリアンは，ある程度まで，「役割」を演じているのである。失恋した女主人公はかくなすべしと信じた通りの行動をしているのである。ウィラビーが突然立ち去った後，「別れた最初の夜一睡でもできれば自分は許し難い女だ」と思ったのであろう。悲嘆は育成される。——彼女は「二人で一緒に読み慣れたもの以外は何も読まず，」「ピアノに向かって歌い，また，泣き」二人の好きな歌を弾き，ウィラビーが写してくれた楽譜を眺めて何時間も過ごした。彼女が自分自身の悲嘆を増大しようとしているのみならず，母と姉もまた悲しんでいることを確信しようとしていることは確かであった[2]。

リデルが，メアリアンの恋の描写を真正面から受け止めているのに対し，ローバーは，それを冷静に，ディタッチメントをもって眺めている。

さて，メアリアンは重病から回復した後，これまでの自分の自己中心的な生き方の誤りに目ざめ，周囲の人々の苦楽を思いやる落ち着いた生

活に入って行くことになっている。これはタナー（Tony Tanner）が言っているように[3]，『フロス河畔の水車小屋』のマギー・タリヴァー（Maggie Tulliver）や，『嵐が丘』のキャサリン・リントン（Catherine Linton）に見られるようなデスパレトな変貌ではなく，それだけに物足りない感じを読者に与えるかもしれない。それについては後に見ることにする。

なお，冷静に考えれば，メアリアンがもし思い通りウィラビーと結婚したとしても，彼のような身持ちの悪い男と無事に添い遂げられようとは思えず，かえって不幸への道を歩むことになったであろう。

(3) 打算にゆらぐ婚約

メアリアンの姉エリナーは，エドワード・フェラーズ（Edward Ferrars）を愛していた。エドワードはジョン・ダッシュウッドの妻ファニーの弟で，この夫妻がノーランドを継ぐことになったとき，彼も一時そこを訪れて，当時まだノーランドに留まっていたエリナーと会い，二人は愛し合うようになったのであった。但し，どちらの側からもその気持をはっきり口に出すことはなかった。

エドワードの母フェラーズ夫人も，ファニーも，彼が世に名の知れるような一廉の人物になることを希望していたが，本人はさらにその気はなく，家庭的な静かな生活を送るのが念願であった。万事目立つことの嫌いな内気な青年なのであった。

ところで，エドワードには四年前に秘密に婚約を交したルーシー・スティール（Lucy Steale）がいた。ルーシーは，エドワードが個人教授を受けていたプラット氏（Mr. Pratt）の姪で，若かったエドワードは彼女の魅力を素晴らしいと感じたのであったが，今となっては，教養がなく，粗野な彼女に嫌気がさしていた。それでも，物堅いエドワードは，自分から婚約撤回を言い出そうとはしなかった。ルーシーの方でも，彼の気持が冷めたことには気づきつつも，財産家のフェラーズ家の嗣子であるエドワードと結婚することの有利さを考え，彼を離そうとはしなかった。

ルーシーは親戚にあたるミドルトン家に滞在していたとき，隣家のエリナーと知り合いになり，「これは，あなただけにお話しするので，絶対に他の人には言ったら駄目よ」と前置きして，自分がエドワードと婚約の間柄であることを告げたのであった。ルーシーは，エドワードをエ

リナーが愛していることに暗黙のうちに気づき,彼女を牽制するために,この告白をしたのであった。

この告白は，エリナーにとって大きなショックであった。自分がじっと心に秘めて愛していた男性に，既に婚約者がいたとは！　エドワードが平素から，若いに似ず沈んだ面持ちを崩さないのがエリナーには気掛かりだったが，このことに原因があったのかと，彼女はこの時になって気がついた。しかも，約束を重んじる彼女は，ルーシーに口止めされた以上，このことを誰かに話し，あるいは相談して憂さを晴らす術(すべ)もなかった。なお，この頃彼女は妹のメアリアンから，ウィラビーとの問題で何かと悩みを訴えられる辛い立場にいた。

さて，フェラーズ夫人は，かねがねエドワードの結婚相手として，30,000ポンドの財産を持つモートン嬢（Miss Morton）を考えていた。そこへ，エドワードとルーシーの秘密の婚約が夫人に知られるときが来た。ジェニングズ夫人がこの秘密を小耳にはさんで，ジョン・ダッシュウッド夫妻に話したからである。女家長（matriarch）の権化ともいうべきフェラーズ夫人はこの話を聞いて怒りに燃え，立ち所にエドワードを廃嫡(ちゃく)し，財産はすべて次男のロバート（Robert）に譲ることにする。このことがあっても，ルーシーは一応，殊勝にもエドワードと運命を共にする決心を彼に告げる。その一方，でも，もし，あなたが御希望ならば私は身を退(ひ)きますとも言う。

ブランドン大佐は，エドワードが収入の道を失ったことを聞き，自分の領地デラフォード（Delaford）の年収200ポンドの寺禄があいているので，彼をそこの牧師に招いて，貧しいながらも生活を可能にしてやろうと考える。そして，この用向きを伝えることをエリナーに依頼する。彼女にしてみれば，自分の愛する人が他の女性と結婚するのに手を貸すという皮肉な使いを仰せつかったわけである。

さて，ルーシーの機敏さ，計算の速さには端倪(たんげい)すべからざるものがあった。彼女は折を見てロバートに近付き，彼と駆け落ちするのである。婚約がどうあろうとも，今や相続権を失ったエドワードよりも，これを手にしたロバートの方が，はるかに有り難みのある存在なのであった。フェラーズ夫人は，今度はロバートを廃嫡するが，それは長い期間ではなく，やがてはロバートは許されることになる。ルーシーは，この成り行きをも見通していたのかも知れない。

フェラーズ夫人の目まぐるしい処置について，作者は次のように記している。

> 彼女の家族は最近極度の動揺を経験した。彼女の人生の長い間において，息子は二人いた。ところが，エドワードの罪と追放とによって，彼女は二，三週間前に一人を奪われた。同様にしてロバートを追放することによって，彼女は二週間の間，一人も息子がいないことになった。しかし，今やエドワードの復活によって，また息子が一人できることになった（Ⅲ，xiv）。

ここで言われているエドワードの「復活」は完全なものではなく，10,000ポンドの財産を与えられたのみで，結局，長男としての権利はロバートに移ってしまうのである。それはルーシーが巧妙にフェラーズ夫人に取り入った結果であった。

エリナーは，召使からの誤報によって，ルーシーとエドワードが結婚したものと一時思い込んで悲しみに閉ざされるが，その最中にエドワードが訪れることによって，結婚したのはロバートであり，エドワードはルーシーから解放されたのだと知る。

> エリナーは，じっと坐ってはいられなかった。部屋から小走りに走り出て，ドアが閉まるや否や，喜びの涙にむせんだ。涙は永久に止まることはあるまいと思われた（Ⅲ，xii）。

作品の冒頭で，抑制力に富んでいると紹介されたエリナーも，事に臨んでは，これだけの感情を表出することがあり得るのである。

エリナーの感性に言及した序でに，もう一つの例を見て置こう。

クリーヴランドでメアリアンが危篤に陥り，それを聞いたウィラビーが見舞に訪れる場面がある（Ⅲ，vii）。ウィラビーは既に彼女との交際を絶った後であるが，やはり彼に関する印象を少しでも和らげて置きたかったのであろう。応待に出たエリナーに対して，彼はメアリアンとの交際が破綻したことについて熱烈な言葉で嘆き，言い訳をする。それは結

局は彼の自己弁護に過ぎないものであったが，それを聞いていた間エリナーは我にもあらず，彼に対して好意の湧くのを感じる。それは彼の美貌の故であったろうか，あるいは，熱弁の故であったろうか。この場面についてムーニアム（Laura G. Mooneyham）は次のように記している。

> ウィラビーが物語に再登場するくだりは，ある条件の下では，エリナーのセンスもゆらぐことがあり得ることを示すために導入されたのである。彼の長々しい告白は，それ自体として重要なのではなく，エリナーが感情に動かされる可能性について語っているが故に重要なのである[4)]。

ルーシーの絆から解放されたエドワードとエリナーが結婚することについては，後の章で考えることにする。

(4) フランネルのヴェストと花婿

ブランドン大佐は，サー・ジョン・ミドルトンを介してダッシュウッド家と親しくなった人で，現在三十五歳で年収2,000ポンドである。

さて，彼は過去において，ある悲しい恋をしたことがあった。エライザ・ウィリアムズ（Eliza Williams）という十七歳の女性を愛したのであったが，彼女は大佐の兄と結婚してしまった。失意の彼が数年を外国で過ごして帰ってみると，エライザは幼い娘をかかえて負債者監獄で死の床にあった。彼女は夫に虐待されて居たたまれず，他の男と駆け落ちしたため夫には離婚され，男にも捨てられて悲惨な生活に陥ったのであった。ブランドンは彼女の娘（やはりエライザという名）を救い，よい家庭にあずけたが，この娘が成長後，前にも述べたようにウィラビーに誘惑されたのである。（ちなみに，このエライザ母子に関する話は大佐がエリナーに向かって長々と語ることになっているが，感傷的に過ぎ，また，事の運びに必然性が乏しいように私には思われる）。

こういう過去があるためか，大佐には沈鬱（うつ）な翳りがある。また，日常生活においても，ちょっとでも寒いとフランネルのヴェストを着用し，また，リューマチスに悩まされていることを若い女性たちの前でも話す。これらの点から見て，現在の彼は華やかな話題に縁のありそうな人物とは言えそうもない。

さて，メアリアンとウィラビーとの親しい仲が周囲の人々にはっきり分かり，多くの人々が二人の結婚を当然のことのように期待するようになったとき，ブランドンは自分が体験して痛いほどに知っているウィラビーのドン・ジュアンぶりについて，口を閉ざして誰にも語ることがなかった。ウィラビーが途中で彼女と別れることになったからよかったようなものの，成り行きによっては，メアリアンはエライザと同じ運命を辿っていたかも知れないのにである。ブランドンが，決闘までした相手が性懲りもなく同様の手口を繰り返すのを，なぜ黙視していたのか不思議である。メアリアンに対してだけは，ウィラビーが卑劣な行動に出ないだろうという保証はなかったはずである。ともかく，ブランドンがウィラビーの過去についてエリナーに語るのは，メアリアンとウィラビーとが完全に別れて後のことである。ブランドンは，あまりに紳士然とし過ぎていはしなかったであろうか。

これに反して，この小説の中で，ブランドンの得点になるような出来事が二つある。一つは，エドワード・フェラーズが母親から勘当されて収入の道が絶えたとき，ブランドンが彼のために寺禄を世話したことである。縁もゆかりもない人に対して，純粋な好意からこういう親切な行いをなし得ることは，彼の人柄を示すものであろう。その第二は，クリーヴランドでメアリアンが重病に喘いでいたとき，彼が，バートンにいるダッシュウッド夫人を馬車で迎えに行って連れて来たことである。娘の生死を気遣う母親を慰め，力づけながらの長い旅は，骨の折れる仕事だったであろう。

メアリアンは幸いに病気から回復し，やがて，ネルのヴェストを着た中年の大佐と結婚することになる。

(5)　結婚する姉妹

ジョン・ダッシュウッドは，妹たちに対して自分の財産を分け与えることは渋ったものの，他の誰かが彼女たちに何か有利なことをしてくれることは大歓迎であった。

> ジョンは妹たちのために自分では何もしてやらなかったことに対して十分良心の呵責を感じていたので，他の人々のすべてが惜しみなく面倒をみてくれることを強く望んでいた。ブランドン大佐から

の結婚申し込みとか，ジェニングズ夫人からの遺産などは，彼自身の怠慢を償うのに最もたやすい方法と思われた（II，xii)。

このように他力本願のジョンであるから，メアリアンが大病の結果，目立って容色が衰えたと聞いたときは，それでは彼女の嫁入り先としては年500か600ポンドの相手しかないだろう，あるいは一生自分が彼女を背負い込まなくてはならないかも知れないと大いに心配したものであった。

このような薄情な兄を持っては，妹たちの方でも相当の覚悟が必要となってくる。スコット（P. J. M. Scott）がエリナーについて次のように記しているのは正しいであろう。

エリナー・ダッシュウッドは早くから，人生の厳しさに直面していたように思われる。身の振り方の問題が起こる前から次のことを理解していた――慎重で知的な女性が，現実の社会において，まずまともな我慢できるという程度の結婚をすることさえ如何に難しいか――特に女性がほとんど持参金がない場合には――ということである。まして，豊かに恵まれた生活などは望むべくもないのであった[5)]。

エリナーが，地味で風采もあがらない，そして貧しい牧師のエドワードと結婚する気になるのは，自分の置かれたこのような立場を承知していたことにもよるであろう。

では，メアリアンの場合はどうであろうか。彼女は一旦はウィラビーに恋するだけの華やいだ気分を持っていた。しかし，それに破れ，その上，生死の間をさ迷うほどの病気をしてからは，考え方が変わることになる。病気がほとんど回復したとき，彼女は今後の勉強について次のように姉に語る。

「六時までには必ず起きるつもりよ。その時間から夕食までを音楽と読書に割り当てるの。計画はちゃんとできているのよ。まじめな継続的な勉強を始める決心なの。うちの蔵書は，知り尽くしているので，ほんの慰み程度の役にしか立たないけど，バートン・パーク

には読む価値のある本が沢山あるでしょ。それから，ブランドン大佐から，新刊の本をお借りできると思うわ。一日にたった六時間読むだけでも，十二ヵ月の間には，今の私に欠けている知識がどっさり身につくと思うの」(Ⅲ，x)。

これは，病気回復期の明るい気分が言わせている言葉かも知れない。何れにしても，今までのメアリアンなら考えもしなかった計画であろう。

また，第二章でも見たように，彼女は生活一般についても反省し，今までの自分の勝手さ，思慮の足りなさ，人々への親切心の不足等に思い至る。但し，この反省に基づいて彼女が具体的にどのように変わったかは作中に記してない。それはともかく，恐らく作者は，この後に来る彼女のブランドン大佐との結婚への準備として，彼女が前とは見違えるような女性になったことを言いたかったのであろう。

しかし，メアリアンと大佐との結婚が読者を納得させないことを多くの評家が指摘している。例えばマドリック (Marvin Mudrick) は次のように言っている。

悲しむべきことには，正にこの点において，ジェイン・オースティンの主題の操作が完全に破綻したのである[6]。

また，

この小説の生命であり，中心であるべきメアリアンが裏切られたのだ——しかも，ウィラビーによってではなしに[7]。

タナーは次のように言っている。

メアリアンの視野は今や明らかになってきた。しかし，彼女のエネルギーは無気力に陥ったのである。彼女はおとなしくなり，「市民社会」に入る用意ができたのだ[8]。

バトラー (Marilyn Butler) は次のように言っている。

もし，メアリアンがどうしてもブランドン大佐を愛する気になれなかったらどうなるだろうと，多くの評者たちが疑問に思ってきた[9)]。

ウィラビーの人柄が如何なるものであったにせよ，メアリアンの彼に対する愛は真剣なものであったし，作者は，彼女の喜びと悲しみと行動とを筆を尽くして描いた。読者の心の中にはメアリアンの恋の姿が消し難く定着してしまっている。その後になって，彼女がエライザの二の舞を演ずることなく，ブランドン大佐と平凡な結婚に落ちついたと聞かされても，読者は拍子抜けした感じを否めないのではあるまいか。これは，前述した彼女の経済問題の安定とは次元の異なる事柄であろう。

姉のエリナーの場合は，初めからエドワードを愛していたことになっているので，メアリアンに比して読者を驚かす程度は少ないが，その反面，二人の交際の始めから会話を交わす折がごく少ないこと，会話の内容も実際的必要によるものが大部分であることは，この愛と結婚に関して読者の興味を引く程度を減少させる結果となっている。ただルーシーの介在によって，ある程度の波瀾が用意されているということは言えよう。さて，その問題が片付いて二人がいよいよ結婚する段になっても，その細かい状況は語られず，ただ客観的事実が報じられるのみである。そう言えば，メアリアンの結婚についても，「ブランドンの年齢とネルのヴェストに関する気がかりはあったが，遂に彼女は結婚することになった」と簡単に知らされるだけである。

メアリアンとブランドンとの結婚生活が経済的に安定してはいても，さして恵まれたものではなく，ルーシーとエドワードとの生活が更に貧しいものであることは言うまでもない。この面から見るならば，作中の自己中心的で打算的な人物たち，ジョン・ダッシュウッド，ロバート・フェラーズ，ルーシー・フェラーズ，ジョン・ウィラビー等の方が物質的に豊かな生活を楽しんでいると言える。メアリアンと別れた後のウィラビーについては次のように記されている。

彼がいつになっても心が癒(いや)されず，世を遁(のが)れ住んだとか，暗い気分が常習的になってしまったとか，悲嘆のあまり死んでしまったとかいう噂は信じるに足りない——そのどれも彼には当てはまらないのだから。彼は活発に動き回り，娯楽にも加わる生活をしていた。妻

も常に不機嫌だったわけではないし，家庭も常に居心地が悪いわけではなかった。馬や犬を何頭も育て，あらゆる種類の遊猟にふけることに，彼は少なからざる家庭的幸福を見出していた（Ⅲ，xiv）。

このような書き方を見るとき，オースティンは単純な勧善懲悪の域をはるかに脱していることが分かる。それと同時に，ウィラビーに許された幸福の限界を描くことによって現実感に対する配慮もなされているのである。

そして，二人の姉妹には，姉妹なりの幸福が与えられている。

エリナーとメアリアンとの手柄と幸福の中で，次のことは決して最小のものではあるまい――すなわち，姉妹でありながら，そして互いの家が見えるような近い距離に住みながら，二人は仲違いすることなく，また，二人の夫たちの間に気まずい関係を生み出すこともなく暮らすことができたということである（Ⅲ，xiv）。

これは世間智とリアリズムに徹した作家にして初めて発し得る言葉であろう。

(6) 標題について

一般に『分別と多感』と訳されている標題 *Sense and Sensibility* について，二，三記して置きたい。

イーアン・ウォット(Ian Watt)は，この二語は現代の用法では“Common Sense and Sensitiveness” となるであろうと言っている[10]。それに近い意味を NED で探してみれば次のようになろう。

SENSE 15.b. The recognition *of* (a duty, virtue, etc.) as incumbent upon one, or as a motive or standard for one's own conduct.

SENSIBILITY 5.a. quickness and acuteness of apprehension or feeling; the quality of being easily and strongly affected by emotional influences; sensitiveness.

こうしてみると，日本語の訳語とはだいぶ違ったコノテイションを持った語であることが感じられる。

この小説の中で，エリナーが 'sense' の体現者，メアリアンが 'sensibility' の体現者であると割り切り，両者が常に対比されていると考えることが誤りであることは，作品を注意して読めばすぐに了解できることである。例えば，メアリアンがウィラビーへの恋に悩んでいるとき，エリナーはエドワードに婚約者ルーシーがいることで苦しんでいるのであるが，メアリアンには姉のこの心の中を察するだけの sensibility が見られない。後で姉が四ヵ月間この秘密を守っていたと聞いて，メアリアンは姉の忍耐強さに驚くのである。また，エリナーは，エドワードの指輪にあしらってある巻き毛を彼女自身のものだと思い込み，それが他の女性のものだなどとは思いつきもしないという，sense の不足を思わせる場面もある（I，xviii）。なお，彼女の sensibility が発揮される条については，第三章で既に見た。

sense を拡大解釈して「世俗的な利害を見分ける力」と考えるならば，前に見たようにジョン・ダッシュウッド，ロバート・フェラーズ，ルーシー・スティールそしてジョン・ウィラビー等の行動は正にその典型と言えよう。

注

1） Robert Liddell: *The Novels of Jane Austen*, p. 19.
2） John Lauber: *Jane Austen*, p. 33.
3） Tony Tanner: *Jane Austen*, pp. 100-101.
4） Laura G. Mooneyham: *Romance, Language and Education in Jane Austen's Novels*, p. 42.
5） P. J. M. Scott: *Jane Austen, a Reassessment*, p. 108.
6） Marvin Mudrick: *Jane Austen, Irony as Defense and Discovery*, p. 89.
7） Ibid., p. 93.
8） Tony Tanner: op. cit., p. 99.
9） Marilyn Butler: *Jane Austen and the War of Ideas*, p. 196.
10） Ian Watt: "Sense Triumphantly Introduced to Sensibility" in *Jane Austen* (Casebook Series), p. 120.